

【資 料】

看護大学生における教育の進行度による子育てと家庭づくりに対する意識の実態と子育て経験によるその変化

眞 崎 直 子^{*1}, 松 原 みゆき^{*1}, 森 本 千代子^{*1}, 西 地 令 子^{*1}
森 マツエ^{*1}, 林 真 二^{*1}, 三 徳 和 子^{*2}, 尾 形 由起子^{*3}

【要 旨】

【目的】看護大学生の子育てや家庭づくりへの意識の実態と子育て体験による変化について検討し、看護大学生の子育て・家庭づくりを促進することを目的とする。【方法】対象は、A看護大学生359名（男女比1.4：98.6）であり、結婚、子育て、家庭づくりに対する意識を把握し、学年間の意識、子育て体験による介入後の、養護性、子どものイメージの変化を見た。【結果】学年ごとの子育てに対する意識では、学年が上がるごとに「乳幼児に対する関心」が高くなっており、看護大学生として、授業、演習、実習と体験を重ねるうちに乳幼児に対する関心が高まること示唆された。また、養護性のうち、「将来子育てネガティブ予測」において、介入後の変化に有意差がみられた。【考察】子育て体験前後の子育てに対する意識の変化が「将来子育てネガティブ予測」に関連が見られたことから、乳幼児体験が将来の子育てに対して積極的な影響を与えると示唆された。

【キーワード】看護大学生、子育て、家庭づくり、意識変化

1. 緒 言

近年、少子化や核家族化が進み、就労と育児の悩みが増えている。1人の女性が生涯に産むと見込まれる子どもの数（その年の15～49歳の女性が産んだ数）である合計特殊出生率について、平成2年には、人口の維持に必要とされる2.07を下回る1.57となったことが注目され、「平成4年度国民生活白書」で「少子化」の言葉が登場した。それ以降、少子化が社会的な関心を集め、政策課題が取り上げられることになった（中谷、阿部、乙重、2011）。また、21世紀の母子保健の展望を示す「健やか親子21」の課題のひとつに、「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」がある。それらに対して、各地方自治体を中心に、様々な育児支援の活動が行われるようになってきた。「健やか親子21」では、平成13年から平成26年を計画期間として進めており、これまで平成17年と平成22年には、中間評価を行い、その後、この間の取組について最終評価を行っている。その結果、母親の様々な心配や不安は改善されているものの、妊娠期から子育て期の切れ目のない包括的な支援の点で十分であるとは言えない状況である（健やか親子21、2014）。

一方、若者の子育てや家庭づくりに対する先行研究では、齋藤（2013）によると、少子社会における次世代育成策として、恋愛に積極的な群は、消極的な群に比べて、親密性・家族形成意欲など多くの項目で値が高かった。自尊感情、親密性を育み、次世代育成力につながる支援が望まれている。また、若者には、結婚することや子どもを産むことが自分や家族の幸せや成長につながるであろうと実感できるような体験や情報を得ることが肯定的に作用すると考えられ、若者が肯定的な情報や体験を得られるような取り組みが求められている（竹原、三砂、2006）。

加えて、看護師の結婚、子育てによる退職や職務継続の困難等ワークライフバランスに対する意識の回答を看護大学生の男女別で比較すると、男性は「収入」や「昇進」への関心が高いのに対し、女性は将来新たに加わる役割（出産や育児など）を考え、その場合の仕事について関心をもっているという特徴が認められている（竹川、2011）。

そこで、本研究では、看護大学生の子育てと家庭づくりに関する意識を把握すること、さらに、子育て体験を通して、学生の育児や家庭づくりへの意識、

*1 日本赤十字広島看護大学 地域看護学

*2 人間環境大学

*3 福岡県立大学

態度の変化について検討し、子育て・家庭づくりに
についての意識に関連する要因を考えた。

合わせて、看護大学は、入学後の実習等での育児
体験が得やすい状況から、授業、演習、実習を通し
て、子育て体験が可能となることから、学年ごとの
結婚、育児、家庭づくりに対する意識の違い、また
子育て体験後の、子どもに対する養護性やイメージ
の変化、結婚、子育てに対する意識の変化について
検討した。

Ⅱ. 用語の定義

子育てや家庭づくりの意識：わが国における子ど
もや子育てを取り巻く環境を考える上で少子化とそ
れに関係する問題であるといえ、子どもを生み育て
やすい環境づくりに向け、子育てや家庭づくりをど
う捉えているかの意識である。

子育て体験：地域の子育て支援センターや子育て
サロンにおいて、乳幼児とふれあう体験をし、同時
に保護者（母親）の話を聞く体験である。

養護性：相手の健全な発達を促進させるために用
いられる共感性と技能（Fogel, Melson & Mistry,
1989）と定義され、生涯発達の視点を含む、対象は
子どもや赤ちゃんだけでなく幅広い、慈しみの心が
ある、という3つの特徴を有している。子育ての意
識の1つであり、親としての特性として、父性や母
性、ジェンダーの視点を踏まえて捉えた親性、次世
代育成能力、親準備性、養護性などの概念が使われ
ている。本研究では、その中で養護性を上げた。

Ⅲ. 研究目的

看護大学生の子育てや家庭づくりへの意識の実態
と子育て体験による介入後の意識（養護性）および
子どものイメージの変化について検討し、看護大学
生の子育て・家庭づくりを促進する一助とする。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究方法

1) 研究対象者

A 看護大学生1年～4年573名のうち、調査に回
答した359名を対象とした（回収率62.7%）。

また、その中で研究期間内に市町村の子育て支援
センターでの子育て体験をすることを呼びかけ、そ
れに応じた23名については、介入前後の変化を分析
する対象とした。

2) データ収集期間

平成22年9月1日～12月25日まで

3) データの収集方法・手順

平成22年9月に全学年の学生に無記名自記式質問
紙法を実施した。（ベースライン）その後3ヶ月後
の平成22年12月に再度養護性と子どもへの意識につ
いて無記名自記式質問紙法を実施した。

また、無記名のまま介入前後の調査票リンケージ
を行うため、介入前調査で、自ら5桁の数値を決め
てもらい、介入後調査で自ら決めた5桁の数字を記
載してもらった。

4) 調査内容

性別、「過去の乳幼児の世話体験」、「学校での保
育体験」、「乳幼児に対するイメージ」、「子育てに対
する意識（養護性）」、「結婚・子どもをもつこと
に対する希望」、「夫婦間での育児の分担意識」につ
いてである。

「過去の乳幼児接触体験を測定する尺度として、
花沢（1992）が作成した乳児接触体験質問紙にある
15項目から7項目を選定した。回答形式は、中学以
前と高校以降の2つの時期について、各項目に対し
て「全くしたことがない」（1点）、「少ししたこと
がある」（2点）、「かなりしていた」（3点）、「毎日
していた」（4点）の4件法で評定した。

「子育てに対する意識」について、岩治（2009）
が作成した45項目で構成される養護性尺度等から20
項目を採用した尺度を使用した。回答形式は、各項
目に対して「全く当てはまらない」（1点）、「かな
り当てはまらない」（2点）、「少しあてはまらない」
（3点）、「少しあてはまる」（4点）、「かなり当ては
まる」（5点）、「非常に当てはまる」（6点）の6件
法で評定した。

養護性については、Ⅰ乳幼児に対するネガティブ
な感情因子、Ⅱ親に対するポジティブな感情因子、
Ⅲ将来の子育てに対する関心因子、Ⅳ乳幼児に対す
る関心因子、Ⅴ将来の子育てに対するネガティブな
予測因子とした。また、Ⅰ乳幼児に対するネガティ
ブな感情因子は、「子どもはあまり好きでない」、「小
さい子どもの相手は苦手である」、「赤ん坊の泣き声
を聞くとイライラすることがある」、「赤ちゃんを見
ても、別にかわいいとは感じない」、「遊んでいる子
どもの声をうるさいと覚えることがある」とした。
Ⅱ親に対するポジティブな感情因子は、「私の母親
は私の気持ちをよく理解してくれていたと思う」、「
母親について良い思い出があまり浮かばない」、「親
が自分を育ててくれたように自分の子どもを育てたい」、
Ⅲ将来の子育てに対する関心因子は、「将来育児を
楽しんでいる自分の姿を想像できる」、「将来、子ど

もと遊んでいる自分の姿を想像できる」,「できれば自分も親となって子どもを育ててみようと思う」,Ⅳ乳幼児に対する関心因子は,「テレビに赤ちゃんが出てくると興味を持って見る」,「幼い子どもが泣いていると,何とかしたいと思う」,「幼児の姿をついで追っていることがある」,Ⅴ将来の子育てに対するネガティブな予測因子は,「将来,泣く赤ちゃんを前にして途方にくれている自分を想像する」,「将来自分が子どもをうまく育てることができるかどうか不安である」についてである。回答形式は,各項目に対して「全く当てはまらない」(1点),「かなり当てはまらない」(2点),「少しあてはまらない」(3点),「少しあてはまる」(4点),「かなり当てはまる」(5点),「非常に当てはまる」(6点)の6件法で評定した。なお,負の負荷量を示している「母親について良い思い出があまり浮かばない」については,逆転項目の処理を行う。

「結婚・子どもをもつことに対する希望」については,調査票において「将来結婚したいと思いますか」「将来,子どもを持ちたいと思いますか」について,「はい」「いいえ」「わからない」から選択してもらった。「夫婦間での育児の分担意識」については,自身がどの程度子育てに関わっていくか,パートナーにどの程度関わってもらいたいかの視点から,次の7項目とする。1「妻が外で働き,育児は夫が行う」,2「夫婦共働きで,夫の方がかなり多めに育児を行う」,3「夫婦共働きで夫の方がやや多めに育児を行う」,4「夫婦共働きで育児は夫婦同程度に分担する」,5「夫婦共働きで妻の方がやや多めに育児を行う」,6「夫婦共働きで妻の方がかなり多めに育児を行う」,7「夫が外で働き,育児は主に妻が行う」である。

本稿では,紙面の都合上,学年ごとの「結婚・子どもをもつことに対する希望」,「夫婦間での育児の分担意識」,「乳幼児に対するイメージ」,「子育てに対する意識(養護性)」および「子育て体験」を実施した者のみ介入前後の「乳幼児に対するイメージ」,「子育てに対する意識(養護性)」変化をみることに限定した。

5) 分析方法

ベースラインでは,学年ごとの結婚,子育ての意識を確認し,各集団間での違いを一元配置分散分析により検討した。子育て体験した23名については,介入前後の,育児体験による養護性,子どものイメージの変化をWilcoxon符号付順位和検定により検討した。解析には,SPSSVer.19およびFSTATを使用した。

2. 研究の倫理的配慮

研究対象者には,研究の目的や意義,参加に際し,対象者の負担・苦痛や不利益に対する配慮について書面および口頭で説明するとともに,参加は自由意志であり,プライバシーを保護することを明記した説明文書を添付した。質問紙の返信をもって同意されたものとした。本研究は,日本赤十字広島看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:1106)。

3. 研究フィールドの状況

A看護大学の所在地であるH市は,人口114,038人,高齢化率23.5%(平成22年国勢調査)であり,全国平均の23.0%,広島県の23.9%と比較してほぼ同割合となっている。また,0～14歳の年少人口は減少傾向が進み,少子高齢化が進んでいる。なお,世帯数は年々増加し,核家族化が進行している。

4. 介入方法(子育て支援センターおよび子育てサロン)

H市では,子育て支援センターのある建物内において,毎日10時～15時まで母親と子どもが集い,子ども同士が接し,母親同士が交流し,孤立しがちな母親がエンパワメントする機会となっている。また,地域では,民生委員や母子保健推進員が中心となり,公民館等において,子育てサロンを開催している。

今回,H市の協力を得て,A看護大学生24名を子育て支援センター等で子育て体験を行い,乳幼児と母親との交流の機会を得た。学生が,2～4名が1組となり,平日の午前または午後の約2時間交流した。そこでは,子どもと触れ合ったり,保育士を中心とした遊びを一緒に行った。

V. 結 果

1. 対象者の概要および看護大学生の子育て,家庭づくりに対する意識

A看護大学生1年～4年573名のうち,回答者は359名,回収率62.7%である。男女は,14:98.6と女性が多かった。結婚を希望する者は,82.5%で,将来子どもを持ちたいのは,85.2%であった。将来の育児分担については,「夫婦共働きで分担同程度」が最も多く,51.8%,「妻が多め(ややも含む)」が45.1%,「夫が多め(ややも含む)」が3%であった(表1)。

2. 学年ごとの子育て,家庭づくりに対する意識の変化(表2)

学年ごとの子育てに対する意識について,一元配置分散分析を行い,検討した。養護性については,「乳幼児に対するネガティブな感情」(5項目:5～30点)

表1 対象者の概要

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	全体
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
	65	126	60	108	359
性別					
男	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (4.6)	5 (1.4)
女	65 (100.0)	126 (100.0)	60 (100.0)	103 (95.4)	354 (98.6)
子育て体験					
あり	0 (0.0)	8 (6.3)	6 (10.0)	9 (8.3)	23 (6.4)
なし	65 (100.0)	118 (93.7)	54 (90.0)	99 (91.7)	336 (93.6)
結婚					
あり	55 (84.6)	101 (80.2)	48 (80.0)	92 (85.2)	296 (82.5)
なし	1 (1.5)	3 (2.4)	4 (6.7)	3 (2.8)	11 (3.1)
わからない	9 (13.8)	22 (17.5)	8 (13.3)	13 (12.0)	52 (14.5)
将来子どもを持ちたいか					
はい	54 (83.1)	105 (83.3)	51 (85.0)	96 (88.9)	306 (85.2)
いいえ	3 (4.6)	4 (3.2)	2 (3.3)	2 (1.9)	11 (3.1)
わからない	8 (12.3)	17 (13.5)	7 (11.7)	10 (9.3)	42 (11.7)
将来の育児の分担					
夫が主に育児	0 (0.0)	1 (0.8)	1 (1.7)	1 (0.9)	3 (0.8)
夫多めに育児	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (5.0)	0 (0.0)	3 (0.8)
夫やや多め	1 (1.5)	2 (1.6)	0 (0.0)	2 (1.9)	5 (1.4)
夫婦同程度	39 (60.0)	69 (54.8)	24 (40.0)	54 (50.0)	186 (51.8)
妻がやや多め	20 (30.8)	42 (33.3)	22 (36.7)	37 (34.3)	121 (33.7)
妻がかなり多め	2 (3.1)	3 (2.4)	2 (3.3)	8 (7.4)	15 (4.2)
妻が主に育児	3 (4.6)	9 (7.1)	8 (13.3)	6 (5.6)	26 (7.2)

表2 学年と養護性・乳幼児のイメージ（一元配置分散分析）

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	全体	検定
	人	人	人	人	人	
	65	124	60	108	357	
学年と養護性						
乳幼児に対するネガティブな感情（5～30）						
平均値	11.1	10.9	12.2	11.2	11.2	n.s
標準偏差	4.46	4.59	5.99	4.57	4.82	
親に対するネガティブな感情（4～20）						
平均値	15.8	15.9	15.7	15.9	15.9	n.s
標準偏差	2.47	2.40	2.98	2.20	2.46	
将来子育てポジティブ予測（3～18）						
平均値	12.3	13.1	13.5	13.3	13.1	n.s
標準偏差	3.42	3.22	3.64	2.93	3.26	
将来子育てネガティブ予測（3～18）						
平均値	10.8	10.9	10.8	10.7	10.8	n.s
標準偏差	3.38	3.08	3.27	3.08	3.16	
乳幼児に対する関心（3～18）						
平均値	11.8	12.9	13.2	13.5	12.9	p=0.03
標準偏差	3.50	3.51	3.77	2.94	3.43	
学年と乳幼児のイメージ						
活動性（-18～18）						
平均値	-2.51	-2.73	-2.94	-2.16	-2.55	n.s
標準偏差	2.61	2.45	3.10	2.65	2.66	
乳幼児好感度（-8～8）						
平均値	0.76	0.50	0.03	0.49	0.47	n.s
標準偏差	2.07	1.56	1.97	1.69	1.77	
乳幼児有能性（-10～10）						
平均値	-0.45	-0.56	-0.76	-0.49	-0.55	n.s
標準偏差	2.77	2.14	2.42	2.03	2.27	

「親に対するネガティブな感情」(4項目:4～20点)「将来の子育てに対するポジティブ予測」(3項目:3～18点)「将来の子育てに対するネガティブ予測」(3項目:3～18点)「乳幼児に対する関心」(3項目:3～18点)である。その結果、学年ごとの有意差がみられたのは、「乳幼児に対する関心」であった。学年が上がるほど関心が高くなり、看護大学生として、授業、演習、実習と体験を重ねるうちに乳幼児に対する関心が高まることが示唆された。

学年ごとの乳幼児のイメージについて、一元配置分散分析にて解析を行った。乳幼児のイメージは、「活動性」(9項目:-18～18)、乳幼児好感度(4項目:-8～8)、乳幼児有用性(5項目:-10～10)で、検討した。学年間による有意差はなかった。

3. 子育て体験による変化(表3)

子育て体験した23名について、介入前後の子育てに対する意識の変化を対応のある符号付きWilcoxon検定により検討した。

養護性については、乳幼児に対するネガティブな感情については、有意差はないものの、やや低下していた。親に対するポジティブな感情および将来の子育てに対するポジティブ予測、乳幼児に対する関

心については、有意差はないものの、やや高くなっていた。また、将来子育てネガティブ予測において、介入後に低下する傾向に有意差がみられた。

乳幼児のイメージの変化では、有意差はないものの活動性が低下傾向であり、乳幼児好感度および乳幼児有用性について有意差はないもののやや高い傾向がみられた。

VI. 考 察

欧州では少子化傾向に歯止めがかかり、増加に転じている国もある。一方、わが国の少子高齢化は、好転の兆しも見えていない(総務省「国勢調査」, 2010)。少子化の課題は、晩婚化、晩産化の進行に加え、2人目、3人目の出産を控えることにあるといわれている(内閣府, 2014)。それに対して、国や地方自治体は、さまざまな取組を展開している。今回、A看護大学生に子育てと家庭づくりに対する意識について調査を行った。将来看護職となる看護大学生が、子育てや家庭づくりをどのようにとらえ、仕事と家庭のワークライフバランスを考えているかを把握することで、今後の子育て支援について示唆が得られるのではないかと考える。

表3 子育て体験後の学生の養護性や乳幼児のイメージの変化(Wilcoxon)

	介入前	介入後	検定
	人 22		
介入の養護性の変化			
乳幼児に対するネガティブな感情（5～30）			
平均値	11.1	10.9	n.s
標準偏差	4.46	4.59	
親に対するネガティブな感情（4～20）			
平均値	15.8	15.9	n.s
標準偏差	2.47	2.40	
将来子育てポジティブ予測（3～18）			
平均値	12.3	13.1	n.s
標準偏差	3.42	3.22	
将来子育てネガティブ予測（3～18）			
平均値	10.8	10.9	Z= -2.27 p<0.05
標準偏差	3.38	3.08	
乳幼児に対する関心（3～18）			
平均値	11.8	12.9	n.s
標準偏差	3.50	3.51	
介入の乳幼児のイメージの変化			
活動性（-18～18）			
平均値	11.1	10.9	n.s
標準偏差	4.46	4.59	
乳幼児好感度（-8～8）			
平均値	15.8	15.9	n.s
標準偏差	2.47	2.40	
乳幼児有能性（-10～10）			
平均値	12.3	13.1	n.s
標準偏差	3.42	3.22	

1. 子育て、家庭づくりに対する意識について

対象となった看護大学生は、女性がほとんどであり、看護師を目指す看護大学生の結婚観は、半数は夫婦同程度育児分担を望んでいるものの、4割以上は女性が主とすると考えていることから育児への積極的な関与が感じられた。先行研究では、看護短大生73名の「将来結婚したい」と答えた者は72%、「子どもが好き」と答えたのは81%で、その全てが「将来子どもを持ちたい」と回答した。将来の子育て方法は、「子どもが小さいときは家庭にいて子どもが大きくなったら働く」と「育児は取るが働き続ける」を合わせると80%であり、多くの学生が職業志向的なライフコース観を持っていることが明らかになった（高橋，2014）。また、齋藤らは、2013年に少子社会における次世代育成策として、虐待やDV（domestic violence）とは無縁の養育力を備えた家庭形成を目標とした、若者への支援について検討し、恋愛に積極的な群は、恋愛に消極的な群に比べて、親密性・家族形成意欲など多くの項目で値が高かった。高校生の将来の家族形成意欲と恋愛観・性役割観などとの関連を調べ、自尊感情、親密性を育み、次世代育成力につながる支援が望まれる。

今回、学年ごとの子育てに対する意識を見たところ、養護性については、学年が上がるごとに「乳幼児に対する関心」が高くなっており、看護大学生として、授業、演習、実習と体験を重ねるうちに乳幼児に対する関心が高まることが示唆された。今後は、体験を重視した教育を強化し、看護師として、また仕事を持ちつつ、子育てを可能とできるよう、学生時代の体験を充実させることが求められていると思われる。先行研究でも参加型学習の教育を展開しており、今後は、ますますその必要性が増すと思われる（中村他，2012）。

2. 子育て体験による変化

子育て体験前後の子育てに対する意識の変化が「将来子育てネガティブ予測」に関連が見られた。このことは、育児について、子どもと接することの大変さを実感したと思われる。むしろ、第1子を出産した母親がこれまで子どもと接したことがなければ、頭でイメージしていたことのギャップがあることでの精神的な負担感が増すと考えられる。このことは、出産前の早い時期に子育て体験を経験することの大切さを示唆している。また、乳幼児との接触体験が将来の子育てに対して積極的な影響が与えられるという先行研究（野村，河上，長谷，藤原，2007）からも子育て体験の重要性は示唆されており、今回の結果から、地域における子育て体験のシステムづく

りが求められていると思われる。

3. 看護大学生の子育て、家庭づくりの意識について

看護大学生は、女性がほとんどであり、ほとんどが結婚することを希望している。また、子どもを持つことについても積極的である。一方で、看護師を目指しながら、半数は夫婦同程度育児分担を望んでいるものの、3割程度は女性が主とすると考えていることから、仕事だけではなく、育児や家事にも高い志を持っているように感じられる。その結果から、育児に責任を重く感じすぎないように、育児と仕事の両立について学生同士考えていく機会を持つことも必要であると考えられた。

学年ごとの子育てに対する意識の中で、養護性については、学年が上がるごとに「乳幼児に対する関心」が高くなっており、看護大学生として、授業、演習、実習と体験を重ねるうちに乳幼児に対する関心が高まることが示唆された。今後は、体験と現実に感じたことを言語化し、子育てや結婚への希望に自身に気付かせるような仕掛けづくりも重要であると思われる。

子育て体験前後の子育てに対する意識の変化が「将来子育てネガティブ予測」に関連が見られたことから、乳幼児体験が重要であることは明らかとなった。また、学生は、地域の子育て支援の現場でふれあうことで、「誰かに相談することの大切さ」を感じているようであった。学生自身も周囲の母親のよき理解者となり得る効果もあり、今後はさらに、地域の子育て支援の関係機関との連携を深めていきたいと考える。

4. 今後の施策への可能性について

今回、H市と共同で行ったことで、看護大学生の行政が行う乳幼児相談への意識が変わったようである。すなわち、子育てで社会全体が支援することの大切さを確認し、相談できる場や多様な支援する人たちの重要性を気づいていた。子育てで困った時に相談できることが不可欠であることから、今回のような体験を多くの学生と共有していくことは意義があると思われる。また、家庭に入っても、地域でこのような交流活動が行われている実態を知り、エンパワメントやヘルスプロモーションの視点で、一住民としても関わっていくことの大切さに気づいていた。また、同世代の少し先輩である母親との交流により子育てや家庭へのイメージを持つ機会となり、ポジティブなきっかけづくりとなった。

今後は、子育て支援のこれまでの検証を行い、地域特性に応じた施策の展開が急務であると思われる。

る。これまでも先進地であるスウェーデンのファミリーセンターやフィンランドのネウボラなどを参考に自治体で独自に取り組んでいる地域もある（内閣府，2014）。母子保健施策の充実のためには，妊娠期から子育て期にわたるトータルでシームレスなケアを可能にする必要があり，その実現のためには，大学生など若者を視野に入れ，より一層世代間交流が重要になると思われた。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究では，一看護大学における看護大学生での結果であることから一般化することは困難であろう。今後は，他大学も含め，さまざまな地域での取組によって知見を蓄積していくことが重要であると思われる。

VIII. 結 論

本研究では，看護大学生の子育てや家庭づくりへの意識の実態と子育て体験による意識の変化について把握するため，A 看護大学生1年～4年573名に対して，無記名自記式質問紙法にてアンケート調査を平成22年9月～12月まで実施し，359名（回答率並びに有効回答率62.7%）からの回答を得られた。調査結果から看護大学生の子育てや家庭づくりに対する意識の実態と子育て体験による意識の変化について明らかになった。

子育て・家庭づくりを促進する看護大学生の教育の進捗度と看護大学生の子育てと家庭づくりを促進するには，学生時代に子どもとふれあい，母親の話を聞くことで子育ての大変さを実感する体験が重要であることが示唆された。

謝 辞

本研究は，平成22年度広島県「若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査研究」補助事業研究助成を受けて実施した。

文 献

阿部範子（2010）．育児不安を持つ母親が求める子育て支援サービス，日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学紀要，14，23-27。
Fogel, A.D, Melson, G. F & Mistry, J. マカルピン美鈴訳「子どもの養護性の発達」，小嶋秀夫編「乳幼児の社会的世界」，有斐閣選書，1989，170-186。
花沢成一（1992）．「母性感情の発達」，花沢成一著「母性心理学」，医学書院，1992年，79-85。

岩治まとか（2009）．大学生における養護性の検討，東京家政大学研究紀要，49，133-142。
内閣府（2014）．平成26年度版少子化社会対策白書概要版，2014年11月2日，<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2014/26pdfgaiyoh/26gaiyoh.html>
中谷隆，阿部将史，乙重直子（2011）．若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査研究報告書－持続可能な次代の親育ての取組に向けた提言－。
中村順子，荻原麻紀，佐藤美恵子，大高恵美，阿部範子，佐々木亮平，木下彩子，酒井志保（2012）．エビデンスに基づく看護大学生の参加型学習プログラムの提案 つながって安心プロジェクト，日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学紀要，16，45-49。
野村幸子，河上智香，長谷典子，藤原千恵子（2007）．子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ，人間と科学，県立広島大学保健福祉学部誌，7(1)，169-180。
齋藤幸子，星山佳治，内山絢子，近藤洋子，原美津子，宮原忍（2013）．高校生の恋愛観・性役割観と家族形成意欲に関する調査研究 男女共同参画社会に向けた若者への支援について．厚生の指標，60(1)，17-24。
齋藤幸子，宮原忍，内山絢子，星山佳治，近藤洋子，佐藤龍三郎（2010）少子社会における成人期への移行に関する母子保健学的研究 大学生および中学生の意識と行動に関する調査より，日本子ども家庭総合研究所紀要，46，127-150。
健やか親子21（2014）「健やか親子21」最終評価（概要）について，2014年11月2日，<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/saisyuuhyouka.html>
総務省統計局（2014）．平成22年総務省「国勢調査」，2014年11月2日，<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do>
高橋明美（2014）．看護学生のライフコース観に関する研究 学生の志向および母親のライフコースとの比較．川崎市立看護短期大学紀要，19(1)，21-27。
竹原健二，三砂ちづる（2006）．若者の結婚や子どもに対する価値観と少子化への考察 沖縄と関東における質的研究より，思春期学，24(4)，590-600。
竹川那奈世，大倉美佳，桂敏樹，白井香苗（2011）．ワークライフバランスに関するK大学看護学生の意識調査，健康科学 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要，7，1-8。

Changes in attitude about child-raising and family development in nursing students with advancing levels of education

Naoko MASAKI^{*1}, Miyuki MATSUBARA^{*1}, Chiyoko MORIMOTO^{*1}, Reiko NISHICHI^{*1},
Matsue MORI^{*1}, Shinji HAYASHI^{*1}, Kazuko MITOKU^{*2}, Yukiko OGAKATA^{*3}

Abstract:

Purpose: The aim was to examine current attitudes and behaviors about child-raising and family development in nursing students and how they change with child-raising experience, in order to investigate the factors that promote child-raising and family development in nursing students. **Methods:** We ascertained attitudes about marriage, child-raising, and family development in 359 students (male to female ratio of 1.4:98.6) at Nursing College A, and observed changes in attitude with year and in nurturance and ideas about children after intervention involving a child-raising experience. **Results:** Comparisons of attitudes about child-raising by year suggested that students become increasingly interested in babies as their education progresses and that their interest in babies as nursing students heightens with more classes, lectures, practical training, and experiences. Regarding nurturance, ‘negative expectations of child-raising in the future’ changed significantly with the intervention. **Discussion:** The change in attitude about child-raising after a child-raising experience was associated with a change in ‘negative expectations of child-raising in the future,’ suggesting that experience with babies may have a positive impact on future child-raising.

Keywords:

nursing students, child-raising, family development, change in attitude

* 1 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing * 2 University of Human Environments
* 3 Fukuoka Prefectural University